フツーの生活プロジェクト

クィアでないクィア生活

作：ミツヨ・ワダ・マルシアーノ／國永孟
画：早川宏美

さいはて社

はじめに

この本を手に取ってくださったあなたは、「フツーの生活」と聞いて何を思い浮かべますか？　両親がいる、子どもがいる、パートナーがいることですか？　それとも何不自由なく毎日暮らしていけることでしょうか？

では周りに目を向けてみてください。あなたの友達や職場の同僚が、どんな風に生活しているのか想像することができますか？　日常生活で交わしている何気ない会話から、その人も自分と同じような暮らしをしている気もするし、もしかすると全く知らない面があるかもしれない、とも思うことでしょう。そうしたハッキリしない何かを表現する時についつい使ってしまうのが「フツー」という言葉ではないでしょうか。

それから、この2年間で「フツーの生活」を意識する機会がグッと増えたに違いありません。新型コロナウィルス感染症の蔓延によって、人の存在を肌で感じる機会がめっきり減ってしまいました。それまで道端で何気なく交わしていた挨拶もなくなり、気づけば1日誰とも話していなかった、なんてことはありませんか。こうした暮らしが、コロナに直面する社会での新しい「フツーの生活」であり、私たちはそれに慣れるしかないのでしょうか。

時間の経過と共にこれまで当たり前だった考え方や習慣が、過去の遺物として時代遅れになっていくのはそれこそ「フツー」のことだったかもしれません。ですが変化はある日

突然やってくる訳ではなく、たいてい気がつかないうちにジワジワと生活の中に浸透していきます。ですから無意識のうちに変化を受け入れることが出来る人がいる一方で、ある日突然周囲から取り残されてしまった、変化に適応しすぎて周りに合わせられないと気づく人たちもいます。そうした時に生じる心のなかのモヤモヤを、言葉やイラストの形で掬い上げること。些(いささ)か唐突ではありますが、それが本書の狙いです。

ここでタイトルについても触れておきたいと思います。皆さんは「クィア」という単語をお聞きになったことがあるでしょうか。巷ではこの言葉がＬＧＢＴＱ＋と同じ意味合いで使われているのをしばしば見かけます。つまり「フツー」と思われている男女の異性愛の規範を実践していない人たちのことです。しかし、この本のなかで使われる「クィア」という単語は、より豊かな意味の広がりを持っています。無理を承知で一言にまとめると、セクシュアリティに限らず、世の中で多くの人が「フツー」と思っている様々な慣習や暗黙のルールを受け入れることができない、またはそれに対して抗(あらが)おうとする態度のことを指します。肌理(きめ)に逆らって何かを読み解いたり、行動したりすること、とも言えるでしょう。本書に出てくる多くの登場人物たちは、ある意味で「クィア」な人々と言えます。ですが、その人たちも「フツー」の日常生活を送っているのだ、ということを探求し、表現していくことが、本書を通してクィアを「クィア」するということなのです。

本書は5つのテーマから成り立っています。「フツーの生活」はまず、現在進行形で私たちが経験しているコロナとの共生から始まります。最初の〈フツーのコロナ生活〉では、コロナ下に生きる等身大の私たちの生活を、後に振り返ることができるように記録しておきたいという願いも込められています。次の〈フツーの23才〉ではタケシくんが登場します。読者の皆さんは、これから23才を迎える人、とうの昔に過ぎ去ってしまった人など様々でしょう。23才という年齢を選んだのは、多くの人にとって学生から社会人となる節目にあたる時期だからです。人生の大きな転換期に、今までの生活とも、想像していた生活とも全く異なる現実に直面しなければならない若い人々の心の機微（きび）を捉えようと試みました。

また、本書の大きな狙いのひとつに、レズビアンとゲイの人々の「フツーの生活」の発信があります。近年、LGBTQ+という言い方でメディアに取り上げられる機会も増え、映画やドラマでクィアなキャラクターが登場することも珍しくなくなりました。ですが当事者でなければ、クィアな人々のリアルな生活を見聞きする機会は限られています。さらには、クローゼットを余儀なくされている当事者にとって、自分たち以外のクィアな人たちがどうやって「フツー」に暮らしているのか皆目見当もつかない場合もあります。〈フツーのレズビアン〉、〈フツーのゲイ〉のエピソードが、読者のみなさんにとって周りの人や自分自身のより良い理解につながることを願ってやみません。

最後の〈フツーのシングルマザー〉では、シングルマザー生活をスナップショットでご紹介します。ここでのエピソードを読むと、彼女たちが母親であると同時に、喜怒哀楽に満ちた1人の人間であることを改めて実感します。子どもにしてみれば彼女たちは大人であり、どこまでも母親でしかないのですが、年月を経て子ども自身が成長するにつれて、それまで見えていなかった人間臭さを大人のなかに発見することがあります。そうした感覚を本章は与えてくれるはずです。

この本で扱うことの出来る「フツーの生活」は、人の数だけ存在する生活のほんのひと握りに過ぎません。ですが私たちは、身近なテーマを集めて、ともかくそれらを発信することから始めることにしました。なぜなら、タケシくんやみっちゃんたちの生活に触れることで、読者の皆さんが「これは自分の話だ」、「自分はひとりじゃないんだ」、と気づくことができるかもしれないからです。あるいは、彼／彼女と同じアイデンティティを持っているけれど、自分の送っている生活とは全く違っているなあ、と発見する可能性もあります。もしくは、全く想像できなかった人々の生活について、少しでも思いを巡らせることが出来るようになるかもしれません。

本書が、ひとりでも多くのみなさんにとって「明日が来るのが楽しみ」と思えるような、「フツーの生活」を送るための助けになれば幸いです。

（國永 孟）

もくじ

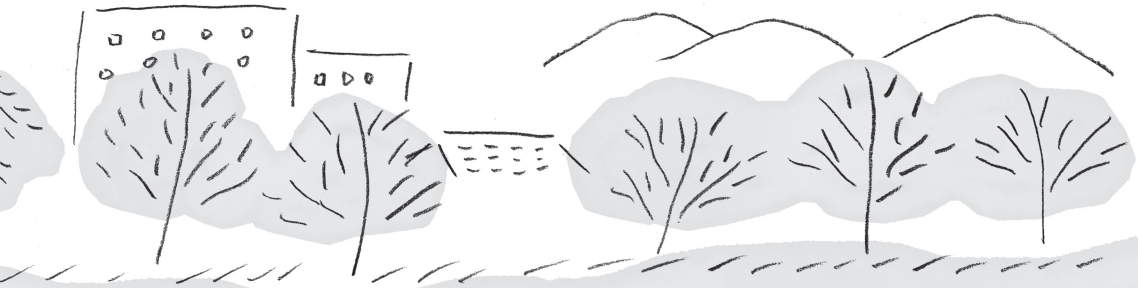
8 はじめに

フツーのコロナ生活

17 電車の中で　その1
18 電車の中で　その2
20 ガマンの限界
22 路上のくしゃみ
23 オンライン生活の果てに
24 スーパー銭湯にて
26 不信の時代
28 もとに戻れない
29 副反応が怖い
30 マスクと私
34 〈コラム〉「フツー」がフツーでなくなった毎日

フツーの23才

41 実家に帰省中
43 親戚の集まり　新年会
44 親戚の集まり　法事
46 〈コラム〉「イエ」制度と23才のジレンマ
48 学会にて
49 永遠のトイレ問題
50 〈コラム〉トイレとジェンダー問題



フツーのレズビアン

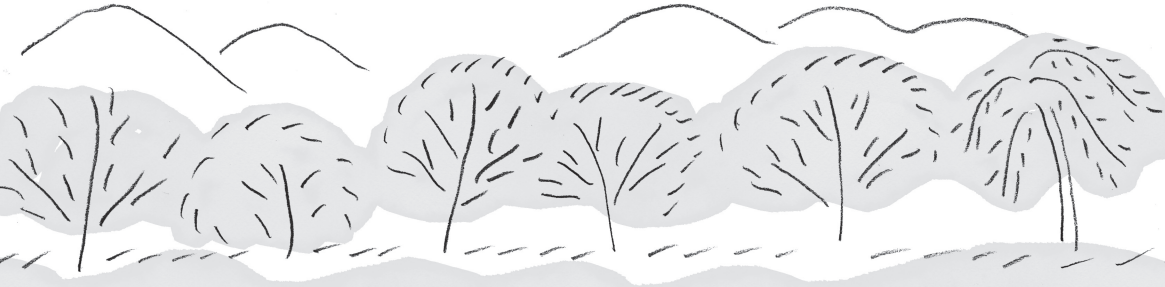
57 運動
58 シンデレラ
59 酔っ払いとコンタクトレンズ
60 酔っ払いとアイスクリーム
62 コンビニの前での考現学
66 〈コラム〉フツーのレズビアン

フツーのゲイ

71 今どきの若いゲイの話
72 結婚話の次は
74 同僚じゃないんですけど
78 コミュニティスペース
79 自己紹介
80 〈コラム〉コミュニティスペースの今
82 フリートーク

フツーのシングルマザー

87 手づくりじゃないおやつ
88 ゲーム機との戦い
90 ケンカの仲裁
92 2万回のごめんね
93 永遠のように思える哀しさ
94 〈コラム〉フツーのシングルマザー みつよさん編
97 温泉にいきたい
98 なんとなくさみしい
100 なんとかなる
101 写真
102 〈コラム〉小さな国とコミュニティ
106 あとがき



路上のくしゃみ

フリーのコロナ生活

親戚の集まり 法事

手伝った方がいいかな…

ワイ

ワイ

おいタケシー

まあ呑め呑め〜

は、はい…ありがとうございます

弱いんだけど

あ！僕それ運びますよ！

あんたはいいのよそこで呑んでなさい

おいぜんぜん進んでないぞー

ワイ

ワイ

いやぁ〜もう…

2時間後

BEER

ワイ

ワイ

結局、何もできず…

フリーの23才

コンビニ前での考現学

フリーのレズビアン

僕たち同僚じゃないんですけど

フリーのゲイ

何階？
24階！景色良さそう
ピッ
18
19
20
21
22
23
24
25
RESTAURANT BAR
あった！ここだ
ピッ
ワワワワ
お！いい感じ。ベッドもおしゃ……
わ！
ツインになってる…
ぴ。
俺たち、出張に来た先輩と後輩だと思われたな…
まあまあ
がっくり
FRONT

ケンカの仲裁

今夜は仕事で遅いからグラミー賞録画しておいてくれる？
OK〜
翌朝
ニコ!!
ピッ
グラミー賞撮れてないじゃん
あ、ごめん忘れた
バン
忘れたで済むなら警察いらないよね！
何だ
それ
ボスッ
ママだって忘れることあるじゃん
朝からなんだよ!!
ニコ
まちなさい！
バタバタ
ドタン
あっちいけよ！
1時間後
喧嘩の仲裁がいないってのも大変だなあ・・・
ハア
ゼエ
ゼエ

フツーのシングルマザー

あとがき

「フツー」って何ですか？　そんなもの無いですね。でもそんなものがあるという幻想、それが社会を構成しているのだと思います。２０２０年秋、大学で「Queer Visions」というシンポジウムをやりました。すでにコロナ禍は渦巻いており、対面でシンポジウムは無理だと言われていた時期でしたが、東京、大阪、広島から登壇者の方々がやってきてくださり、多くの観客が参加してくれました。この企画は、クィアな立ち位置を単にジェンダー・アイデンティティの中に落とし込むのではなく、もっと広い範囲の人々の生活に向ける活動はできないかということを問うことが狙いでした。この時、シンポジウムのポスターをデザインしてくれたのが、『フツーの生活プロジェクト』の作画を担当している早川宏美さんです。つまり、あの時からこの本のアイデアは始まったのでした。

まずはレズビアンの話を描こうと思いました。それも京都という地味な地方都市に生き生きと生活しているレズビアンたちの生活です。共産党は頑張っているけれど、京都はご存じの通り保守的な街です。随筆家・大村しげさんじゃないですが、しまつを贅沢にすり替えることのできる「しぶちん」の街です。でもそこがなかなか魅力的。『フツーの生活プロジェクト』にとってはもってこいの環境だと私は思っています。そんな保守的な街では、なかなか人々は自分自

身のアイデンティティを主張して生活していません。僕はゲイです、わたしはビアンですといったフラグをわざわざ立てることなくフツーにしているわけです。結果として街を歩いていても、大学にいても、会社で仕事をしていても、一見皆フツーの人に見えるわけですね。しかし、先にも書きましたが、フツーなんてものは無いわけですから、そこのところを『フツーの生活プロジェクト』では描きたいと思いました。

２０１４年に亡くなったイラストレーター・安西水丸さんが、１９８０年代末から『普通の人』シリーズを執筆し続け、それが昨年「完全版」として再版されました（『完全版　普通の人』２０２１年、クレヴィス）。安西さんと村上春樹さんとのコラボレーションは時々本屋で目にしていたので、この完全版を改めて手に取ってみたわけですが、ずいぶん当時の時代感が反映されているなあという感想でした。その帯コピーに「これは今を生きる、私やあなたのお話です」とある。でも、残念ながら安西さんのこの漫画は、私の話ではなかった。

『フツーの生活プロジェクト』は、square企画によって制作されています。スクエア、つまり四角ですね。わたしを含めた４人の力で生み出されています。先ほど言及したデザイナーの早川宏美さんを中心に、構成を考えるのは京都大学人間・環境学研究科の大学院生・國永孟さんとわたし、そしてわれわれのアイデアを「揉んだり」――なんかやらしい――本という形に

するための航海長を務めるのが、さいはて社の社長兼編集者・大隅直人さんです。年齢も、仕事も、性的指向や性別自認も異なるわれわれ4人のsquare企画は、何処へ向かうかという目的を重視するのではなく、むしろ日々の生活の中で自分が一番面白いと思うことを形にすること、またそれを楽しみながらこの本を作っています。

最後になりましたが、square企画はこれら4人がいつの間にか自然発生的に結びついたオーガニック集団というわけではありません。京都大学経営管理大学院の山内裕教授から、文部科学省から助成金を受ける「HISTORY MAKERS 本来を劇的に表現し、未来を美的に想像する。」という名称の5年間プロジェクトに参加しないかとお誘いがありました。「HISTORY MAKERS」には多分野から数多くの方々が参加していますが、私はきっとこの『フツーの生活プロジェクト』が「本来を表現し、未来を想像する」点において、彼のプロジェクトに僅(わず)かばかりの貢献ができるのではないかと思い、お引き受けすることにしました。つまりsquare企画の初年度運営資金は、この山内教授の「HISTORY MAKERS」に助けられたというわけです。山内先生、ありがとうございます。

「本来を表現し、未来を想像する」ことは、言葉にするより実際はずっと難しいと思います。誰もがきっと「このアイデアを何かの形にしたいな、人に見せたいな、聞かせたいな」と思っ

ても、まずそのアイデアを形にするためには大きなハードルを乗り越えないといけません。また、アイデアが形になったとしても、それを人に見せたり聞かせたりする、つまり社会の中に持ち込むとなると、もうひとつの大きなハードルを乗り越える必要があるでしょう。さらに、この作品となったアイデアを使ってお金を稼ぐことは、もっと高いもうひとつのハードルを越えなくてはならないことでしょう。square企画は、それを一からやってみたかったんです。私たちが作り上げた『フツーの生活プロジェクト』が、果たして「本来を劇的に表現し、未来を美的に想像」できたかどうかは怪しいですが、本来伝えたかったものを表現したこと、またこんな未来であって欲しいという思いと共に制作を進めたことは間違いありません。私たちのような素人（じゃない人も含んでいますが）にできたことなら、きっと読者の皆さんにもできるはずです。そのノウハウをこの本から垣間見て頂けると幸いです。square企画は、『フツーの生活プロジェクト』の続編を現在考案中です。皆さん、これからも応援してください。

（ミツヨ・ワダ・マルシアーノ）

著者紹介

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ　―　京都大学大学院文学研究科　教授

大学で映画・メディア学を教えています。専門は日本映画・映像文化ですが、東アジア映画、ドキュメンタリー映画、エコロジー映画、映像アーカイブ問題、クィア理論にも興味があります。趣味は、長年やっているヨガと最近習い始めた太極拳です。武当（Wudang）派の先生から学んでいます。我が家ではビーヌ（Bīnoo）という犬を飼っていて、このマンガにも時々登場しています。「絶対に自分が面倒をみるから」という息子の甘言に騙されて飼い始めた犬ですが、今は私が面倒を見ています。

國永 孟　くにながはじめ　―　京都大学大学院人間・環境学研究科　博士後期課程

アメリカとイギリスの映画を中心に研究し、ハリウッド映画のイギリス・イメージや英米合作映画製作、ヘリテージ映画がおもな関心です。最近、ビデオカメラを買いました。友人からは、スマホがあるのに何で今さらと言われてばかりです。でも重みがあって手に馴染むし、動画を撮ることに特別感があってとても気に入っています。映画研究者は思ったより機械に弱く（?）、動画編集を始めたのはいいものの、四苦八苦している最中です。

早川 宏美　はやかわひろみ　―　グラフィックデザイン・イラスト

イラストや手書きの文字を活かしたデザインが得意技。京都の編集ユニット ホホホ座ではデザイン要員として活動することもあります。マンガ制作は今回が初挑戦なので、キャラクターの統一感がないのはご愛嬌。最近の趣味は、刺し子と落語好きが高じてはじめたお三味線。おばあちゃんみたいです。

フツーの生活プロジェクト　クィアでないクィア生活

作：ミツヨ・ワダ・マルシアーノ ／ 國永 孟
画：早川 宏美

発行日　2022年5月30日
発行者　大隅 直人
発行所　さいはて社
ホームページ　https://saihatesha.com
メールアドレス　info@saihatesha.com

Copyright © 2022 by Mitsuyo Wada-Marciano, Hajime Kuninaga, Hiromi Hayakawa
ISBN 978-4-9909566-7-7